

槐 かい

岡井省二創刊

平成24年4月号

平成二十四年四月一日発行 第二十二巻第四号 通巻第二百五〇号 毎月一回 一日発行
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



鮫 鰯

高橋将夫

冬籠六畳の間がわが宇宙
三寒も四温も飯は腹八分
毛衣や人にも脱皮といふがあり
どちらかが影かも二羽の寒鴉

二度ばかり吹いて葛湯を渡しけり
晴天や越後吹雪いてゐるといふ
変身が得意な孫と日向ぼこ
待春のマリオネットは声もたず
一羽から総崩れする鴨の陣
寒鯉となりて緋色の鮮やかに
鮫鱈の口がゆらりと魂を吐く

槐安集

水野恒彦

歌かるた星々あまた殖すかに
白鳥の天与の白と思ふべし
我が生は深く沈みし竜の玉
いのちみな濡れて生まるる牡丹雪
生きるとはときどき喜劇浮氷

延広禎一

天籟に紅葉且つ散る檜皮葺
酒器の名を妹背と言へり初しぐれ
狐火に搦め捕られし海馬かな
潮まねき明日の絆を紡ぐかに
流れ鮑なまこや磯の小花に朱唇ある

加藤みき

赤き実を辿りて森の冬日向
日の本の大和に拝す小正月
羊羹の艶をほめをる寒見舞
冬の靄われに成算一つあり
菓子作る椿に葉つば貫ひけり

石脇みはる

四斗樽に田毎の種を浸しけり
福笹をかざしつもどる雨の宵
ゆく道の悲喜こもごもや冴返る
立春大吉京菓子の色いろいろ
風光る余呉の湖辺に母と座す



中島陽華

紐育の空を窺ふ睦月かな
僧の袈裟緋色なりけり冬の空
龍の玉跳ねて下谷の歓喜天
おとがひを解くや晴海の出初式
はなに透くてつさなりけりときめける

栗栖恵通子

去年今年コートの釦とれさうな
狐畏指うつくしき男かな
歌垣の山下り来し若菜籠
見返しの平家納経初あかね
背山よりむらさき寄する浮寝鳥

竹内悦子

結婚五十六年
金銀の鶴折つてゐる睦月かな
風花や仏足石に来てとまる
傘閉ぢて開きて雪の兼六園
初恋や猿に食はれてしまひけり
涅槃図に風の揺らぎや猫のこゑ

大島翠木

ムンクの叫び元日の餅ふくらみぬ
果てしなき衷心に松明けにけり
乳房少し膨らむ思ひ鏡餅
愛されて疑ひ知らぬ水仙花
竹林の螺鈿の青や寒土用

雨村敏子

初御空和紙に包んで五色豆
龍天に登る産土雨の音
墨筆硯かたはらに梅の風
晩節てふことばありけり白魚汁
鮫鱈のよそゆき顔で売られけり

本多俊子

父なるや母なるや雪山仰ぐ
人間はこめかみさやに古女食ふ
しづかなるいろを重ねて寒椿
蒼々の星空を知る金海鼠かな
星々へ光掲げて冬木の芽

近藤きくえ

点滴のひと雫なり寒の星
御佛に身のひしひしと初灯明
朝日浴ぶ田平子の土くろぐろと
心ふくくらむ大寒の梅林
かどとれし風と臘梅碧き空

近藤喜子

雪ふりつむ愛の深まるやうにかな
松をさめ空ひそやかに力抜く
光きはだつ天狼の孤高かな
小面の笑み早梅の蕾かな
濡れてきし獣の声よ春隣

谷村幸子

筆おいてぶらり出でたり福寿草
日のぼつとさして朝の冬菜畑
覗かれて葉牡丹のなほ艶めけり
水琴窟きくに並びて雪の庭
石像の一休さんと鴨の群

久保東海司

綿虫の雲をこぼるる日にまどふ
牡蠣すする余生暫く安泰に
鐘撞いてひびき掌にあり年迎ふ
宵戎ぬくき日和も福の内
火事近しつつじの冬芽呼びおこす

瀬川公馨

風花の肉もて万死くり返す
穂俵やキムジョンウンといふ男
水輪を仰ぐや毒気抜かれたる
檀紙の上に日陰蔓と藪柑子
凍空うがつ香山の離れ技

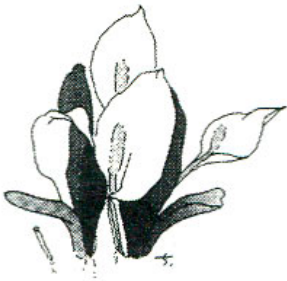
西村純太

新しき扉に記す箴言去年今年
初夢や筋はなけれど富士に鷹
寒林に幣を捧げて歩みけり
寒月へ兎が一羽また一羽
よれよれの鬼がきたれり春隣

香山||真鶴香山

中野京子

初御空人の寿命を越ゆる木々
木に倣ひ土に倣へる今年かな
言の葉に伏せ字の見ゆる冬木の芽
身がばつと明るくなりし冬の晴
顔の寒の微風に洗はるる



槐市集

中道愛子

畝高く葱を囲うて大和かな
黒豆もごまめも孫に伝授せし
かきもちを赤白黄と吊しけり
寒詣赤き鳥居をくぐりけり
栃餅や故郷につづく峠道

橋本正二

スカート^めを捲つてゆきし春疾風
おくれ毛のカールに絡む春の雪
寒紅の色たしかめる小指かな
湯上りの冬の素足を抱いて寝る
お多福のお面はずせば雪女

橋本順子

登校の子らの鈴の音芹なづな
鳥居の朱冴えし潮の満つる時
木の橋の小さな窪み葶咲く
連山や馬の眉毛に付きし雪
山眠る地中の寢息抱くやうに

藤澤陽子

海鼠囁む笑ひ上戸とわらひけり
陪冢に冬たんぽぽの小さくあり
夢の世か若草山の凍蝶は
寒雷やひと無口なる越の国
玉砂利を雪解氷のうがちけり



槐集

高橋将夫選

切山椒触れ合ひし手の置きどころ 岡崎 寺田すず江

凍らねば神にはなれぬ夜の滝

寒林に星の雫の煌めきぬ

けふ一日空回りして寒の水

あこがるるまだ見ぬ現冬木の芽

おでん屋の数ほど秘法ありにける 守口 柳川 晋

あつさりと関東煮くわんとうだきの旗に従く

宵戎巫女は拔身を振り翳し

鬼を追ひ黄泉比良坂ふみ越ゆる

この国のために撒きたる寒ごやし

大焚火風土記の国の闇を焼く 枚方 熊川 暁子

忘我とは日のありあまる冬菜畑

初鏡をんなが一人出来あがる

しんにようを青龍のごと初硯

胸高に鈴を鳴らして晴着の子

現世の右往左往やにらみ鯛 摂津 中田 禎子

田作の良し悪し大風呂敷となる

藁しべのあり初東風の置土産

心根の渴きに寒の水一斗

一隅の明るくなりし室の花

元日や静かなる朝猫の耳 岡崎 犬塚 芳子

鴟尾天に一も二もなく年明くる

幻の恋猩猩木の真つ赤つか

雪の華きそひて精霊語り合ふ

神の池鴨はひかりにつつまるる

測量の杭を打ち込む枯野かな 守口 岩下 芳子

水飲みに出て現なるかまど猫

万万の水凍滝となりにけり

大寒の樹の皮厚く構へたる

軒先の氷柱賑はひぬたりけり

銀河往來

高橋将夫

◇「槐集」 観照

凍らねば神にはなれぬ夜の滝 寺田すず江

月光を浴びて輝く夜の滝の神々しさが目に浮かぶ。凍結した滝の緊張感と厳しさを志向する作者の精神の風景。

他に「切山椒触れ合ひし手の置きどころ」へ寒風に星の雫の煌めきぬ」へ「けふ一日空回りして寒の水」へ「あこがるるまだ見ぬ現冬木の芽」の句があるが、掲句から一転しておだやかな雰囲気漂う句が並ぶ。卒寿まであと三年の作者のこの若々しさに大きな声援を送るとともに、私自身の励みとしたい。

おでん屋の数ほど秘法ありにける 柳川 晋

秘法といえば大袈裟だが、考えてみるとおでん屋にもラーメン屋にもその店秘伝の味がある。つまり、秘伝の味はおでん屋の数だけ有るわけで、秘法だって同じ様なものだと言わなければならないところが痛快。と言いつつ、作者は関東煮の客の列に加わっている。〈あつさりと関東煮の旗に従く〉の句がそれである。「槐」の「華厳・密教的宇宙観、世界観」は別に秘法ではないし、「俳句は精神の風景、存在の詩」は錦の御旗でもないが、なんとなくそのあたりを達観しているように感じられて、この二句に注目した。ちなみに、この句は特別作品「秘法にも旗にも従かず瓜膾 小形さとる」に触発されたものである。

その他では、〈この国のために撒きたる寒くやし〉（宵戎巫女は抜き身を振り翳し）も風刺や諧謔味があつておもしろい。

しんにようを青龍のごと初硯 熊川 暁子

初硯で書いた之繞（しんによう）の字が青龍のようだったという。よほど豪快な筆捌きだったのであろう。

他にも〈大焚火風土記の国の闇を焼く〉〈忘我とは日のありあまる冬菜畑〉〈初鏡をんなが一人出来あがる〉の句に共感を覚えたが、特に〈初鏡〉の句の〈女が一人出来あがる〉の大胆な表現には脱帽するばかりである。

心根の渴きに寒の水一斗 中田 禎子

心根の渴きに寒の水を一斗もかけられて、渴きも一遍に吹き飛んでしまったことであろう。

他では、〈現世の右往左往やにらみ鯛〉〈田作の良し悪し大風呂敷となる〉の句が世の中の核心をシニカルに捉えている点に共感。〈糞しべあり初東風の置土産〉の句で見逃しそうな糞しべを捉えて置土産と詠み込んだ技量にも感動した。

神の池鴨はひかりにつつまる 犬塚 芳子

神の池の鴨は光に包まれ、神のご加護を一身に受けているのであろう。作者の心も光に包まれていることと思う。

〈幻の恋猩猩木の真つ赤つか×雪の華きそひて精霊語り合ふ〉の句も若々しい感性で、好感がもてる。〈鴟尾天に一も二のなぐ年明くる〉は他力本願、達観の一句。

大寒の樹の皮厚く構へたる 岩下 芳子

人は着ぶくれて、木々は皮を厚くして冬に備える。冬に樹皮が厚くなるかどうかは知らないが、寒々とした冬木の肌を見てみると、確かにそんな気がしてくる。

〈測量の杭を打ち込む枯野かな〉は核心を衝いている。（以下略）